

1. 筆者は社会問題提起力を次のように考えている。●既存の言説・制度・政策・慣習など, その存在の自明性(当然の存在とみなす)を疑い, その偶有化をはかる(他の選択し・可能性を探る)ことで, その在り方を根源から問いかける能力のこと。●なぜそれが自明視されてきたのか, その原因を読み取ること(p.20)

2. 教材は、子どもたちの日常にある言説・制度・政策・慣習などの中で、その存在が自明視されているもの、そして、子どもたちがそれを分析することで何らかの「社会の大きな構造」を感じ取れるものであれば何でもよい。(p.20)

3. 授業は、学習者である生徒のためにある。この社会問題提起力の育成の上で前提となる自明視というものも、基本的には学習者である生徒(と生徒の周囲にいる大人たち)が自明視してさえいれば良いのであって、指導する側である教師(=意識の高い人間)は少なくとも気が付いている必要がある。(p.21)

**4. 教師は常に批判理論についての教養, そしてその研究成果を学び, 自身も社会を分析できるそうした人間になることが求められるのである。
(p.21)**

5. 社会問題提起力の育成を小・中学校で行っていくためには、こうしたセンシティブな論争問題や国家権力といった事柄ではない、もっと実際に扱いやすく、かつ現行の学習指導要領にも抵触しないような授業開発が求められる。(p31)

6. 社会問題提起には直接つながらないが、そのために必要となる「社会のより大きな構造」の存在を生徒たちに認識させることができるという利点がある。

7. 本本当に教えたいのは批判理論を用いて、社会の自明視された制度や空間、言説などを疑い、そこに隠された権力関係を読み解くための知的作法であり、これを使って自由に社会を読み解ける人間になることを筆者は期待している。